

ユニバーサルデザインのまちづくり講演会記録

日 時：平成22年11月13日（土）

10：00～11：00

場 所：大垣市スイトピアセンター（学習館）

6階 かがやき活動室6-3

1. あいさつ

【寺嶋政策調整課長】

本日は大変お忙しいところ、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。ただいまから、「ユニバーサルデザインのまちづくり講演会」を始めさせていただきます。

私は司会を務めさせていただきます政策調整課長の寺嶋と申します。よろしくお願いいたします。

大垣市では、平成20年9月に「住んでよし、訪ねてよし、すべての人に優しい、思いやりいっぱいのもち・大垣づくり」を基本理念とする「大垣市ユニバーサルデザイン推進指針」を策定し、市民・事業者・行政の協働によるユニバーサルデザインのまちづくりに取り組んでおります。

本年度は、この指針に基づき、誰もが使いやすい公共施設づくりを目指し、ユニバーサルデザインのサインに関する有識者懇談会を設置し、岐阜経済大学との連携により、サインマニュアルの策定に向けて調査研究を進めているところです。

本日の講演会では、それぞれの立場でユニバーサルデザインのまちづくりの意義について理解を深めていただきたいと存じますので、よろしくお願いいたします。

2. 講演

【寺嶋政策調整課長】

それでは、本日の講師をご紹介します。

岐阜経済大学経済学部教授で、地域連携推進センター長の鈴木誠様です。

鈴木先生は、岐阜経済大学において、経済のグローバル化と地域経済政策、協働のまちづくり論などを専門分野として教壇に立たれるかかたわら、平成10年にまちなか研究室マイスター倶楽部を主宰され、大学と地域の協働によるまちづくりに積極的に取り組んでおられます。

なお、平成20年9月に策定しました「大垣市ユニバーサルデザイン推進指針」の策定に当たりましては、「大垣市におけるユニバーサルデザインを生かしたまちづくり研究会」の座長としてご尽力をいただきました。

また、現在、大垣市が取り組んでいます「公共施設におけるユニバーサルデザインのサインに関する調査研究」につきましても、有識者懇談会の座長としてお力添えをいた

だいています。

本日は、「ユニバーサルデザインのまちづくり～住んでよし、訪ねてよし、すべての人に優しい、思いやりいっぱいのもち・大垣づくり～」と題しまして、講演をいただきます。

それでは、鈴木先生、よろしくお願いいたします。

ユニバーサルデザインのまちづくり

～住んでよし、訪ねてよし、すべての人に優しい、思いやりいっぱいのもち・大垣づくり～

【鈴木岐阜経済大学経済学部教授・地域連携推進センター長】

「地域主権」という言葉が定着していますが、2001年の段階で地方分権を実体化する試みが始まりました。これまでの行政サービスや我々の地域活動も、国の意図、考え方に基づかなければ取り組めない状況でしたが、大きく転換したのが2001年頃でした。国も行政サービスを見直す中で、地方分権を進めていくということでした。

しかし、そんなに単純ではなくて、多くの国民、市民からの提案が組み込まれて分権改革が進んできました。この中で、特に重要なことは地方自治、つまり地域に暮らす人が、地域あるいは地方の暮らしを豊かにしていく場合に、自分達自身が行動を起こさなければいけない、地方自治は元来、自分達の地域を自分達で治めることであると記されています。合わせて地域の住民はということですが、地方公共団体の政策決定に積極的に参加して、自分達の意向を的確に反映させる姿勢が望まれます。こういう取り組みをしてきた中で、改めてそうした方向が大事だと確認されて文面化されました。

そして、コミュニティにないものはコミュニティが、NPOにないものはNPOが、そして地方公共団体と関係者と住民が協働して本来の公共社会をつくっていくことが大事だという宣言がされたわけです。

これ以降、具体的な制度改革が猛烈な勢いで進んできました。実はユニバーサルデザインという考え方の紹介は随分前からありましたが、これを実体化して、地域社会をこの考え方につくっていくという取り組みも、分権改革の流れの後押しを受けて進むようになったと言われています。

まず、まちづくりとユニバーサルデザインです。生活にとってユニバーサルデザインとはどういうことなのか。それははじめから市民の多様なニーズを考慮して、性別、年齢、身体的特性、国籍の違いなどにかかわらず、すべての市民が安全かつ安心して生活できるように、建物、施設、公共交通、製品、モノ、サービス、情報など公共的空間機能を中心に、市民の参加と協働によって計画的に実現していくことです。ここでは「はじめから」ということが大事です。バリアフリーという考え方は、作られたモノ、作られたサービスについての要望、要求を元にして、指摘された箇所を変えていくことによってバリアをなくす、偏見をなくしていくことです。ユニバーサルデザインはものをつくる、サービスをつくるすべてのはじめから、あらゆる人達が利用することを想定して共につくっていくという考え方です。そのことが非常に重要視されています。

今日は、公共施設のバリアフリー、ユニバーサルデザインを考えることがテーマになっていますが、公共施設も含めて、いろいろな人が利用する施設やサービス、公共的空間を特に意識して述べています。もちろん、公共的空間の中に公共施設も含まれてくるということです。

ユニバーサルデザインは実はとても深い意味があります。すべての人が利用することを想定して、サービスやモノを共につくるわけですが、その背景には、共につくる仲間から排除しないことがあります。「あの人達は関係ないだろう。」、「あの人達は利用しないだろう。」、「分からなくても良いのではないか。」という考え方そのものを持たない社会を共につくっていかうという考え方でもあるわけです。その点をしっかり押さえておくことが必要です。

そのような理念、考え方の下でユニバーサルデザインを進めていく場合に、大きく7つの原則があると言われています。原則1は、誰もが公明に使えること。原則2は、様々な使い方ができること。原則3は、使い方が簡単で明確に理解できること。原則4は複数の感覚器官を通じて情報が理解できること。原則5は、たとえ誤った使い方をしたとしても事故を起こさず、原状復帰ができること。原則6は、なるべく少ない身体的な負担で使用できること。原則7は、使いやすい大きさや広さが確保されていることです。

これを聞くと、なんとなく「こういうことかな」と推察していただけた部分もあると思いますが、さらに追加して最近では、「長く使えて経済的である」、「品質が優れて、かつ美しい」など、主観に訴える部分も加わっています。愛着を持てることも大事ですし、環境や身体にやさしい、負荷を与えないことも、ユニバーサルデザインの7原則にさらに追加して今日では扱われるようになっていきます。

市民が主体の社会をつくっていく、社会的に排除されるような人々をなくしていくことからして、ユニバーサルデザインは行政だけの仕事ではありません。ですから、今日は、市民の皆さんにもお集まりいただいて、一緒に考えていかうという場が設けられているわけです。ユニバーサルデザインは、行政サービスに反映させるだけでなく、私達の身近な地域社会をつくっていくこと、コミュニティ活動やボランティア活動、市民活動などを通じて、普及したり活用するものです。そして、民間の企業においても、ユニバーサルデザインはとても重要なものになってきています。それによって多くの人達が利用して、経済活動が行われることによって、社会の活性化にもつながっていくことにもなるわけです。

まず、公平にということ、車いすでも乗り降りができる低床バスは大垣市でも近鉄バスなどが積極的に導入してくれるようになりました。路線も非常に多くなってきました。柔軟にということ、誰でも安全に利用できます。単純明快にということ、「ひらく」と「とじる」の文字も表示されたエレベーターも今日では増えてきています。分かりやすくという点では、駅前に設置されている点字や案内板も設けられて、利用機会を増やしていくことも行われています。安全にということ、JRの大垣駅では車いすの方も利用しやすいように、大きなバッグを持って移動する人にとっても利用しやすいように改札口を変えて利用できるようになっていきます。アクアウォークでは、高齢者、車いすで出入りしやすいように、最も効率的に移動しやすいように出入り口に近いところ

にスロープを設けるといふ工夫がされるようになりました。ゆとりある広さでという点では、姿勢や身体障がいの有無にかかわらず、体格の違いにも関係なく利用できるゆとりスペースを設けて、利用する人達の創意工夫で、その空間が安全に安心して、場合によっては楽しく利用できる工夫がされています。

思いやりデザインですが、これは最近の小中学校の教科書、あるいは最近の新聞もそうですが、読みやすい大きな文字が使われるようになりました。読みやすい文字がユニバーサルデザインの分野でも開発されてきています。

いろいろな事例ということで、ソフトとハードを分けてみました。

中部国際空港です。約150人が登録した通訳ガイド、ボランティアガイドが空港に配置されています。最低2か国語、場合によっては5か国語を話されるシニアのベテランの方が配置されて、ホテルや公共交通機関までの案内や誘導など、様々なことに応じていただけます。私も、先日利用した時に、この方達にお世話いただきました。

ハード面では、エレベーター、階段、エスカレーターのとれもが1か所に集約されて、利用する選択の機会が与えられています。このことも利用者の側にとっては利便性のある公共空間づくりということで最近では進められています。このように中部国際空港は、ソフト、ハード両面から見ても、ユニバーサルデザインの考え方にたって設計され、今日では施設を利用しています。

ユニバーサルデザインの現状がどうなっているか紹介します。新しい公共施設の場合は、ユニバーサルデザインの考え方が随所に導入され、誰もが利用しやすくなっています。ただ、古い施設をチェックしていただくと、気づく部分がいろいろあると思います。ですから、まだ古い施設ではなかなかユニバーサルデザインが改善されていません。そうすると、そこをどう工夫するかが大事になってきます。それをハード面だけではなく、利用する側の心遣い、思いやりもとても重要で、それがないと誰もが安心して気軽に利用する、効率的に利用することは難しいです。それから、英語やカタカナといった横文字を利用したサインが設置者の意思によってつくられている場合が多くあります。しかし、それは、高齢者にとって大変読みにくかったり、外国人にとっても日本人がつくる英語表記は意味不明なものがたくさんあります。そうしたものを考え直していく機会にならなければなりません。それから、目の不自由な市民、耳の不自由な市民への配慮はあるけれど、両方とも不自由な方への配慮が不足する場合があります。その点をどう工夫するかということで、最近では振動などを伝える工夫もされています。

そういう中で、公共施設などをユニバーサルデザインの観点から考え直していくときに、行政の課題や役割だけでなく、最近ではこういう施設も指定管理者という民間が受託して行っていることもあります。そうすると公共施設なども従来は行政がつくって、行政が運営していましたが、市民や民間の事業者はサービスの受け手だけではなく、市民も公共施設のユニバーサルデザインを進めていくときに大きな役割を持ちます。それから、公共施設管理の受託を受ける民間事業者もとても大きな役割を持ちます。そして、行政もその一方で責任を持つという役割分担の考え方もとても大事になってきました。このところは、特に公共施設のユニバーサルデザインを考えていくときに非常に大きなチャンスにもなります。特に民間事業者が指定管理者として仕事を請け負うことが多

くなってきたときに、いろんなノウハウを持っているケースがあるし、ノウハウを持っている人達に指定管理者になってもらわなければいけないという選択基準も生まれてきます。ユニバーサルデザインは公共施設をうまく利活用する事業者を選定する基準にもなるということです。

協働の分野です。利用者の参画によって公共施設などのユニバーサルデザイン化をどんどん進めていくわけですが、それぞれの役割を持ちながらも協力し合ってユニバーサルデザインという観点で公共施設の現状や課題をチェックして、改善の道を探っていくということです。まさに今日の場は、協働の分野になります。

ユニバーサルデザインをどう進めていくかです。今後のユニバーサルデザインは、平成20年につくった指針を参考にしながら、協働の観点でハードとソフト両面から進めていくことが必要です。そこで、大垣市ではユニバーサルデザインのまちづくりを進めていく、特に公共施設などを中心としてユニバーサルデザインのまちづくりを進めていくに当たって、次のような観点での考え方を市民の皆さんに発表しました。

1つは、ユニバーサルデザインの普及啓発活動をこれから積極的に進めていこうということです。市民や事業者、行政の協働によってユニバーサルデザインの意義や原則、方法などを分かりやすくPRしながら、デザインが市民生活の一部になるように進めていきたいということを言いました。この間、講演会や今回の企画の準備も進めてきたわけですし、今回、皆様にも呼び掛けて参加いただきました。

それからいろんな生活空間の中でのユニバーサルデザイン化を進めていく。特に公共施設からまず始めていこうということで、この有識者懇談会も立ち上がって取り組みが始まりました。今後は、公共施設や小中学校、地域の皆さんとも連携して、地区センターなどいろんなところのユニバーサルデザイン化を工夫しながら進めていくことが大事になってきます。

それから、思いやりデザインの教育活動を推進していこう。新しい施設については、ユニバーサルデザインの観点で随分と普及が進められていきますし、年代物の施設についてもソフトの面を重視しながらユニバーサルデザインを導入していきます。しかし、そもそもソフト、ハードの前提として、すべて人がつくるものです。人の思い、人の認識の中にユニバーサルデザインを埋め込んでいくことが大事です。強制ではなく、一緒に考え合いながらつくっていくことが大事です。

そこで、小中学校、高校、大学を教育の場として、ユニバーサルデザインを学習していく場をつくっていく宣言をして、現在も取り組みがなされています。特に、小学校、中学校は総合的な学習の時間の中でユニバーサルデザインを学んで、施設のスロープを工夫したり、子ども達が学校教育の現場でやっていますが、中学校を卒業して高校に行くと、途端にそれが見えてこなくなって、大学に行くと、福祉など専門分野に行くと積極的にやりますが、経済や法律の分野へ行くとまったく扱わなくなってしまうという教育の断絶が起きてしまいます。やはり連携をしてユニバーサルデザインを進めていくことを大垣市でもこれから積極的に行うと述べています。

今後ですが、ユニバーサルデザインを普及、啓発しながら、あるいは教育活動の中でも導入しながら、それを奨励するインセンティブを設けてはどうかということで、賞を

考えることも必要ですし、そうした取り組みも全国的に行われています。

高山市の場合は国際的な観光都市です。多くの方が世界中から訪れるまちでは、ユニバーサルデザインはハード、ソフト両面において積極的に導入しなければいけません。また、行政が、公共施設というよりは、むしろ民間が積極的にやらないといけない状況になっています。公共施設の中では、市民ホールや図書館はどちらかという市民が利用します。しかし、駅や公共交通機関、タクシー、バス、ホテル、観光施設は民間が積極的に取り組まないといけません。また、取り組むことによって多くの人達に来ていただけて、物を買っていただいたり、料金を払っていただけて経済的なプラスがどんどん生まれてきます。そういうことから、現在、高山市の場合はユニバーサルデザインの条例を整備して、ハード、ソフトの認定制度を設けています。2009年度、昨年までの段階で、ハード部門で19の事業者、ソフト部門で8の事業者、計27の事業者がユニバーサルデザインの条例に基づく認定者になって活動しています。

ただ、高山市はこのような指針は設けていません。県内でユニバーサルデザインの指針づくりに非常早くから取り組んだのは大垣市で、ルール化に基づいて公共施設からまず改善し、民間の施設、サービスも改善していこうという手順を踏んでやっているのは大垣市の方が先です。高山市も大垣市に視察に来たいと言っていましたので、お互いに連携して良いところを持ち合っていくことが大事だと思います。

このようにして、ユニバーサルデザインのまちづくりは、大垣市が西美濃の拠点として観光交流にも力を入れ、市民の高齢化が進む中で暮らしやすいまちをつくっていく、あるいはそのために施設を改善する取り組みをしています。経済効果を高める点においても、大垣市を訪れる人にとっての安全な空間の場としても重要なキーワードになってきたということを紹介しました。

時間のあるときにユニバーサルデザインの推進指針を読んでいただければ、今日の話が全般的に分かりますので、よろしくお願いします。

【寺嶋政策調整課長】

ありがとうございました。

3. 先進事例紹介

【寺嶋政策調整課長】

続きまして、ユニバーサルデザイン・コンソーシアム事務局長で、株式会社ユーディー・シー取締役の曾川大様です。

曾川様は、株式会社ユーディー・シーにおいて、ユニバーサルデザインの視点から、医療、福祉、建築、都市環境など様々な領域において、具体的な環境づくりや仕組みづくりを進めるサポート活動に取り組まれるかたわら、関連団体であるユニバーサルデザイン・コンソーシアムにおいて、ユニバーサルデザインに関する数多くのイベントやコンサルティング業務に携わっておられます。

また、「公共施設におけるユニバーサルデザインのサインに関する調査研究」につつま

しても、有識者懇談会の委員としてご尽力をいただいています。

本日は、ユニバーサルデザインに積極的に取り組む公共施設や民間施設の先進事例についてご紹介をしていただきます。

それでは、曾川先生、よろしくお願いいたします。

大垣市ユニバーサルデザインのまちづくり

事例紹介 ～分かりやすい、動きやすい、使いやすい～

【曾川ユニバーサルデザイン・コンソーシアム事務局長、株式会社ユーディー・シー取締役】

今日は3つの事例を紹介します。1つ目は岐阜駅北口周辺の再開発です。ユニバーサルデザインの視点でよく整備されており、今年初めて訪れた時に感心しました。新幹線が停まる駅ではないにもかかわらずよくあそこまで頑張ったなど。2つ目は公共施設の事例として、昨年サインの改修工事を行った大田区役所です。最後に、私が住んでいる埼玉県越谷市に一昨年前にできたレイクタウンというショッピングモールをお見せします。

ユニバーサルデザインは、「みんなにとって分かりやすいこと、動きやすいこと、使いやすいこと」と捉えると間違いのないと思っています。「分かりやすい」とは、場所や使い方においてで、例えば製品ではマニュアルがなくても使いやすいことです。「動きやすい」とは、通路や空間が移動しやすいことで、どこへでも行けることです。そして「使いやすい」とは、そこに行って道具や設備が不自由なく使えることを示します。

私は、ユニバーサルデザインには「お金をかけず、さりげなく、ハードがダメならソフトがあるさ」という特徴があると思います。財政難の中、行政にとってさほどお金をかけなくても計画・推進できることが大きなメリットなのではないでしょうか。その点、ハード中心のバリアフリーはどうしてもより多くのコストがかかります。バリアフリーとユニバーサルデザインとの違いについては、前者には終わりがあり、後者には終わりがないことが大きいと思っています。例えば、身体障がい者専用の駐車スペースや駅の階段に設置されている昇降機。これらは整備してしまえば終わりです。ただし、やるからには寸法や安全対策をきちんとしなければなりません。一方のユニバーサルデザインでよく引き合いに出されるのが「スパイラルアップ」という言葉です。作ったら終わりではなく、ソフトとハードをチェックして、悪いところはまた入れ直す。ハードがダメだったらソフト、つまり人力で補いながらより高いレベルを目指していくイメージです。

私は観光地でコンサルをした経験があります。ある古い旅館では、高齢者や車いすの利用者が出入りしやすいように入出口の段差を改修すべきか相談を受けました。歴史的情緒を無くしてまで改修する必要は一切なくて、入れなかつたらみんなで車いすを持ち上げてあげれば良いのです。その際、「さりげなく」とあるように、あまり大袈裟にしないことです。親切も度が過ぎると、されている側の気が重くなります。ユニバーサルデザインには良くも悪くも「アバウト」な面があると思います。利用者が快適で安全に使えるのであれば、いろいろなアプローチがあって良いのです。

それでは、岐阜駅北口再開発の事例を見てみましょう。よく整備されていて、「分かりやすい、動きやすい、使いやすい」という要素を合わせ持っています。一番の特徴は歩車道の分離です。歩行者のデッキ部分と車道や駐車場が分かれています。道路を横断しなくても、安全に反対側に行くことができます。

「分かりやすさ」では、サインが重要な役割を果たしています。実は私は初めての場所でバスに乗るときに必ず迷うのですが、ここではその心配は無いと思いました。大抵の大きな駅ではバス路線は複雑ですが、岐阜駅では番号と色分けにより実にわかりやすい。サインでは、広域の地図から周辺案内サイン、目的地までの誘導サイン、目的地を示す位置サインがきちんとデザインされています。視覚障がい者向けには誘導ブロックがあり、ボタンを押すと音声で案内してくれます。サインの文字と背景色のコントラストもはっきりしていて読みやすい。暗いバックに白い文字が抜いてあるので、一番小さいものでも見やすくなっています。

これは黄金の信長像です。設置されたのは3年ほど前でしょうか。わかりやすさのシンボルとしてこれほどのものはお目にかかれません。黄金の像はまず見たことがない。しかも高さが10mぐらいあります。芸術性は別にして、わかりやすさとしては天下一品でしょう。今朝、この広場でコンサートの準備をしていました。ステージは信長像の真下。観客はデッキから広場に降りる「信長夢階段」に腰をおろせばいい。多目的に使えるのもユニバーサルな一面です。

これは静岡駅前に設置されている家康像です。信長とは対照的に質実剛健かつ地味ですね。でも質感による存在感は十分にあります。このように銅像は土地の文化的シンボルを象徴するモニュメントであり、場所を認知する意味で大変有効です。

これは同じく岐阜駅北口にある交番のサインです。きり絵風のデザインでコントラストがはっきりしています。大垣市内でも芭蕉のきり絵風デザインをバス停等に使っていますね。JR東日本でもこうしたサインを長年採用しています。これは線路に落とした物を駅員さんが拾い上げる絵です。文字がなくても伝わる意味で、優れたデザインだと思います。

「分かりやすさ」はトイレの案内図でも配慮されています。ピクトグラムという絵文字や点字があるので誰もが内部の配置を知ることができます。ところで案内図の横にボタンがありますが、何も書いていないので用途がわかりません。ここはきちんと明示するべきでしょう。

「動きやすさ」では何ととっても歩行者デッキが目を惹きます。段差なくスムーズに動け、雨が防げるルーフが動線に沿って整備されています。地上とは階段、エスカレーター、エレベーターで不自由なく行き来できます。地上の車寄せには身体障がい者用の乗降場スペースがあり、さまざまな利用者の利便性に配慮しています。

「使いやすさ」では、二か所ある多目的トイレが実際に使用してみてよかったです。オストメイトや子ども用便器、簡易ベッドがあり、誰もが安心して利用できます。

このようにユニバーサルデザインでは、「分かりやすさ」、「動きやすさ」、「使いやすさ」の3つが不可欠ですが、まずは「分かりやすさ」が最優先されると思います。全体を把握することから物事が始まるからです。その意味でサイン計画は重要です。それではサイ

ンに絞って役所の事例を見てみましょう。

これは大田区役所の本庁舎です。施設自体は20年ほど前に建てられた地上11階のオフィスビルを転用したものです。ですから、区民から分かりにくいという指摘があったのでしょ。昨年、サインの改修工事をしました。

まず、エントランスロビーには各階と1階の案内サインがあります。黒地に白抜きの文字がはっきりしており、フロアの案内図もシンプルで見やすいです。吹き抜けの上部壁面には空港のような誘導サインがあり、とても目立ちます。総合案内には常時受付スタッフがいますが、さらにフロアに案内係が数名待機しています。ロビーでキョロキョロしているとすぐに気が付き「どこに行くのですか」、「何かお困りですか」と聞いてくれます。ソフト面でのユニバーサルデザインを視点としたサービスですね。

各窓口は番号で区別されており、文字情報と音声で誘導します。電光掲示板では、自分の順番がいつなのか分かるようになっています。窓口やトイレ、階段の誘導サインや位置サインは壁付け型、突き出し型に加え、床にも表記することでさまざまな角度から見えるようになっています。エレベーターホールの案内サインは英語と日本語のものが別々に設けられています。併記すると文字が小さくなるので、場所が許せばこの方が親切ですね。

次は商業施設で、越谷のレイクタウンです。最近ユニバーサルデザインを取り入れた商業施設が増えていますが、社会貢献目的だけではないようです。バリアフリー、ユニバーサルデザインに配慮することが売り上げにつながるようになってきたからだと思います。銀行やデパート、大型のショッピングモールが先進的です。

レイクタウンは、「Kaze」と「Mori」のモールに分かれており、買い物客は迷わずに回遊し買い物を楽しむことができます。駅改札からすぐの場所にあるインフォメーションがありますが、一目でわかる大きなピクトグラムがあります。モールはエントランスから主動線に沿って、空間はもちろんフロアデザインや天井照明で誘導しています。エスカレーターに入る導入口にフロアサインをつけています。エレベーターホールやトイレ、両モールの起点では、床、壁、天井を使って文字や色、ピクトグラムをデザインしています。商業施設では、今までサインに黒を使うことがほとんど無かったのですが、ここでは視認性を優先して使っています。

レイクタウンの特徴は、「ユニバーサルデザイントイレ」を設置していることです。フロア案内を見ると、中央部のいい場所を占めています。普通、トイレは端に設置するのですが、いかにユニバーサルデザインに力を入れているのかがわかります。

ここには多機能トイレの他、キッズトイレやミルクコーナーがあります。家族連れがターゲットですから、こうしたものへの需要が高いのでしょ。

男の子用のトイレは絵で「あ、これは僕達のトイレだ」と分かるようになっています。男の子用、女の子用ともに便器が子どもサイズで使いやすい。さらにトイレの外には、保護者が見守ることができるスペースが用意されています。

トイレブース内には警報機があり、火災発生時にランプが点滅します。例えば聴覚障がいのある方は、音がしても分かりませんので、こうした配慮で非常時には知らせるわけです。

これは駐車場です。駐車済みの場所は赤の、空いているところは緑のLEDランプで知らせています。ところで身体障がい者専用スペースは広くて止めやすいので、健常者が止めてしまうことがあります。特に商業施設の場合は、全員がお客さんなので対応に苦慮しているようです。レイクタウンでは通常の車いすマークだけでは不十分で、店舗が発行する許可証を車内の見やすい場所に置く必要があります。ここまでやると一般の車はなかなか止められなくなりますね。

現在、こうしたユニバーサルデザインを取り入れた取組みが公共施設はもちろんのこと、商業施設でも増えています。今回はサイン環境を中心にご紹介しましたが、移動空間や行為空間、設備、サービス等さまざまな領域で取組みが進んでいます。大垣市でも歴史文化を活かしたユニバーサルデザインの取組みが実を結びつつあります。別の機会にご紹介できたらと思っています。

【寺嶋政策調整課長】

ありがとうございました。

本日は、「大垣市ユニバーサルデザイン推進指針」に基づき、ユニバーサルデザインのまちづくりを一層進めていくきっかけづくりということで開催をさせていただきました。ユニバーサルデザインのまちづくりの意義を深めていただければ幸いです。

「大垣市ユニバーサルデザイン推進指針」の説明を少しさせていただきます。

「はじめに」において、なぜ、大垣市がユニバーサルデザインのまちづくりを進めるのかを記載いたしております。

第3章は大垣市が目指すユニバーサルデザインのまちづくりで、まちづくり理念を掲載しております。『「住んでよし、訪ねてよし、すべての人に優しい、思いやりいっぱい
のまち・大垣」づくり』とさせていただきます。また、この理念を具体化するために、「人々の意識」、「公共施設や民間施設」、「製品・もの・サービス」、「情報内容と伝達方法」の4つの分野で取り組んでいくことにしました。

第4章では、4つの分野の基本姿勢の実現に向け、市民・事業者・行政が協働しながら取り組む目標を掲載しました。

第5章では、鈴木先生からご紹介をいただきましたが、今後のユニバーサルデザインのまちづくりの進め方を記載いたしました。

また、この指針をご一読いただくと幸いです。

それでは、以上をもちまして、「ユニバーサルデザインのまちづくり講演会」を終了させていただきます。ありがとうございました。